

朝倉山椒ノ由來

ト呼ブモノハ *C. baccatum* L. 即チ Bird-pepper ト稱スル一種ノ實カラ製シタモノデ其レハ其實ヲ日乾シ粉ニシテ鹽ヲ交ゼタモノデアロ○屬名ノ *Capsicum* ハ整シ或ハ刺戟スル意味ノ字カラ來タモノデ即チ其實ノ辛辣ナル味ニ基ヅキ名ケタモノデアロ

## ○朝倉山椒ノ由來

牧野富太郎

さんせう(山椒) 即チ秦椒ノ一品ニ朝倉山椒ト云フモノガアル山椒中ノ上品ナモノト評價セラレテ居ル、枝上ニ刺ノナイ一變種 *Xanthoxylum piperitum* DC. var. *inermis* Makino. デアルガ其枝葉花實ノ狀ハ大シテ山椒ト違ヒハナイ、其由來ニ就キ『若水篤信本草倭名辨』ト題スル寫本ニ次ノ如ク詳記シテアル、此書ハ幹貞(姓未詳)ト云フ江戸ノ醫者ノ著シタモノデ此人ハ元ト但馬ニ居ッタトイフコトガ此書ノ文中ニ見エテ居ル

「朝倉山椒ハ其由來但馬養父郡朝倉ノ郷ト云處アリ一郷ニ七個村アリ其内ニ今瀧寺村アリ村ノ中ニ今瀧寺ト云寺アリ故ニ村號トス今瀧寺ノ宅後石崖絶壁アリ高サ十丈許其上ニ廣サ百步許ノ平塹ノ地アリ五六步許引退テ又絶壁上エ立コト十丈許アリ其半岫平塹ノ處自然生ノ蜀椒アリ地ヲ撲シテ茂盛ス其處エハ鳥ナラデハ至コト不能絶崖ノ上ヨリ見出シタルニヤ人ヲ籠ニノセテ釣下テ山椒ノ接穂ヲ取シト云其接木世間エ弘マリ今ニ至テ朝倉ノ名日本國中ニ滿ツ近代丹波國山椒ヲ多ク作り世間ニ貨スルニヨリ人朝倉ヲ丹波ノ事トス蜀椒ノ種子丹波ニモ別ニ有ヤ抑又但馬ノ朝倉ヲ接ヒロメタルカ未<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>之<sup>ヲ</sup>」【牧野云】文中「地ヲ撲シテ」トハ地ニ滿ツル意デアルト思フ

尙右ノ朝倉山椒ニ就キ向井元升ノ『庖厨備用和名本艸』ニ次ノ如ク出テ居ル

「蜀椒 和名抄ニ蜀椒ナシ多識篇ニナルハジカミ今マ俗ニ云アサクラザンセウ……○元升曰本邦ノサンセウハミナ花ナクシテ實ヲムスブ蜀椒ノ類ナリアサクラザンセウノミニカギラズシカレドモアサクラザンセウハスグレテ本艸註ニミニタルニヒトシ」

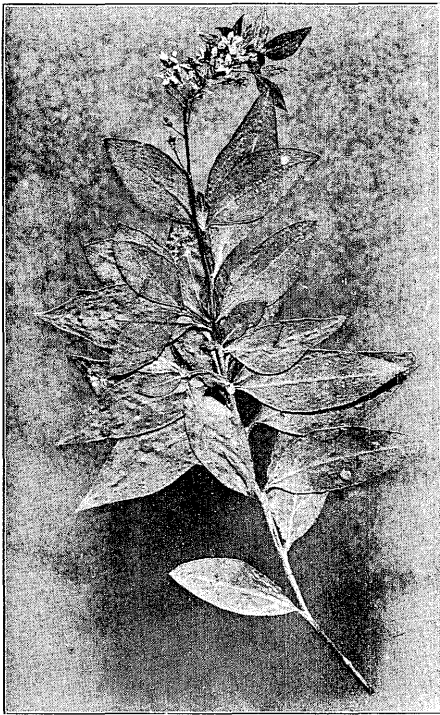


復ビ花莖カラ葉ヲ簇出スル實例ヲ報ズ

アル、樹ニヨリテハ極メテ短キ刺ガ枝ノ中ニ現ハレルコトモアル、又處ニヨツテハ必ズ短キ刺ノアルモノガアツテ長キ刺ノアル普通ノさんせうト刺ノ無イ朝倉さんせうトノ中間ニ立ツテ居ルノヲ見受ケル、私ハ曾テ此短刺ノ品ヲ Var. *brevispinum* MAKINO. トシテ發表シ其和名ヲやまあざくらさんせうトシテ置イタ

### ○復ビ花莖カラ葉ヲ簇出スル實例ヲ報ズ

久内清孝



をかのら のを (Lysimachia clethroides DUBY.)

余ハ本誌五ノ九號ニ於テ花莖ノ先端カラ葉ヲ出スあかそノ例ヲ報ジテ置イタ處神奈川縣警察部衛生課ノ片島正治氏採集標本中ニをかとのをノ花穂ノ先端ニ葉片簇出シテ居ルモノヲ見出シタ  
コノ標本ニツキ觀察シテ見ルト花軸カラ一本ノ枝ガ出デ其枝ノ先端カラ數葉ガ散出シテ居ル而シテ此ノ枝ノ下ニハ花梗ノト同形同大ノ苞片ガアルカラ此枝ハ苞腋ニ生ジテ居ル譯ダ  
此點カラ考ヘテ見ルト此ノ場合ハ花梗ノ先端ニ着クベキ花ガ葉ニ變ジタモノデアラカラ花梗ノ先端ニ著葉シタノデア  
從ツテ本誌五ノ八ニ竹中理學士ガあらせいとうニ就テ詳説サレタ場合ニ接近シテ來ル